

No.49

城陽市歴史民俗資料館
友の会だより

発行
城陽市歴史民俗資料館友の会
(城陽市寺田今堀1番地)
編集:友の会広報担当

発行日
令和4(2022)年4月30日

春ですねえ～

城陽市歴史民俗資料館友の会
会長 泰地 賢治

春ですねえ～。

「高気圧に覆われた12日、京都府や滋賀県は気温が上昇し、京都市内の最高気温は20.9度と今年初めて20度を超え、春らしい陽気となった」(京都新聞、3月13日)とのこと。もっとも、その10日後の22日は最高気温が10度を切る寒い一日でしたが…。なにはともあれ、三寒四温を繰り返しながら、少しずつ、でも確実に陽の光の温かさが力強く感じられるようになりました。

これまで旧暦の「二十四節気」は知っていましたが、最近、「七十二侯」に興味を持っています。「一年を15日ごとにわけて季節を表したのが『二十四節気』。それをさらに5日ごとにわけたものが『七十二侯』。中国由来の、でも日本の気候に合わせられた暦です。」(少し、ご紹介しますね。)

二十四節気	七十二侯	
春分 (3/21頃)	雀始巢 (すずめはじめてすくう)	3/21～3/25頃
	桜始開 (さくらはじめてひらく)	3/26～3/30頃
	雷之発声 (かみなりすなわちこえをはっす)	3/31～4/4頃
清明 (4/5頃)	玄鳥至 (つばめきたる)	4/5～4/9頃
	鴻雁北 (こうがんかえる)	4/10～4/14頃
	虹始見 (にじはじめてあらわる)	4/15～4/19頃

出典:大田垣晴子「季節七十二で侯。」(2013)

動物、植物、気象などいろいろな観点から季節を捉えた昔の人々の感性を面白く思います。

新型コロナウイルスの感染が収まらず、鬱々と家に閉じこもっている昨今ですが、外に出てみませんか? もちろん十分に感染防止に気を配りながら。

季節は移り変わっています。

友の会としても新しい企画をどんどんご案内します。

近いうちに、元気でお会いしましょう。楽しみにしています。

2022年度友の会役員

会長 泰地 賢治

今般、別途ご案内（「書面総会とその表決について」、4月吉日）の通り、新型コロナウイルスの感染防止のため、「第9回総会」を書面による総会とし、その表決は「第9回総会・記念講演会の出欠席について」のご回答を用いて行うこととしました（4月度役員会）。その結果、本総会は会員（85名、2月26日現在）の過半数の回答（63名）をもって成立し、回答者の過半数の賛成（委任を含む、52名）によって全議案が可決されました。そこで、友の会会則第10条に則って「2022年度友の会役員」を下表のとおり委嘱しました。よろしくお願いいたします。

役員名	氏名	担当
会長	泰地 賢治	仏像講座、友の会HP
副会長	吉田 好男	
副会長	小林 心一	文化財講演会、ボランティア窓口
会計	吉田 好男	
理事	村上 直美	仏像講座
理事	佐藤 公美	文化財講演会
理事	高橋 正典	友の会HP
理事	稲岡 計子	古文書講座
理事	名子 昇	「友の会だより」編集
理事	村上 弘芳	古文書講座
会計監査	島本 憲司	
会計監査	加藤 明美	
顧問	工藤 香代子	

兵庫県篠山市を訪れて

歴史民俗資料館友の会会員 企画担当者 小林心一

コロナ禍の中で、研修見学会がなかなかできません。しかし令和3年の秋にはぜひとも実施したいと思い、半年前から計画です。緊急事態の中の八月の下旬の土曜日に二人でこっそり下見に行きました。いつもは四～五人で下見に行くのですが今回は二人です。地元の人に話を聞くと、『十月は黒豆の収穫時期大変込み合います、十一月になると人出はグッと少なくなる』とのこと友の会の行事とも重ならないように、11月27日土曜日に実施としました。十月には緊急事態も解除となりましたが、初旬はコロナ感染がなかなか収まりません。気が気ではありません。バスも二人掛けの椅子に一人で掛けてもらうということで、バスも2台になりました。

当日気温は低いものの快晴です。しかし行くところは丹波地方、地元の言い伝えで「弁当忘れても傘忘れるな」忘れてはいいませんが、言い伝えのとおりになります。前のバスの中で篠山市の解説を済ませ、信号停止の時に後ろのバスに移動して説明中にバスが途中のトイレ休憩場所に立ちよらずに進んでしまいました。これは下見の人員が少なく運転手さんに指示ができなかったためです。反省します。

2 篠山城は家康の命で大阪城攻撃の包囲網の一つとして築かれた城です。城の南側には篠山川が東西に流れ、これも防御の一つです。築城には15か国20諸侯の西国大名が携わり、縄張奉行は三重津城主の藤堂高虎、普請奉行は姫路城主池田輝政が指揮を執り一年足らずで完成されました。堀の内外は石垣で築かれ東側と南側には馬出が作られ、天守はないものの大書院は立派な作りです。初代城主は八上城主で家康の実子松平康重、その後青山家に引き継がれ260年余り江戸幕府のもとに篠山藩5万石、政治・経済・文化の拠点として役割を果たしてきたお城です。

3 篠山市の青山歴史村・デカンショ節・篠山城跡・城下蔵鳳鳴酒造(じょうかくら ほうめいしゅぞう)などが日本遺産の1号に登録されております。篠山市は城下町を古い文化遺産として残し、新しい町は市の西側に造りました。城跡の残る城下町は情緒ある街並みとして残っています。

4 さて駐車場に着くと、雨がパラパラ、昔の人の諺は侮ったらあきません。青山歴史村に向かいます。中にはかやぶきの建物、ほかに丹波デカンショ節館があり伝承のデカンショ節が保存されています。学芸員にデカンショ節の踊りの一部を教わり皆が手足をまねて楽しそうです。次には歴史美術館です。バスは美術館隣の「特産館ささやま」の駐車場に止めさせてもらうのですが、駐車場はマイカーなどでほぼ満杯です。美術館の建物は明治時代の裁判所が美術館とされています。篠山城主であった青山家に伝わる屏風、鎧などが常設展示されています。特別展は刀剣、太刀などが展示中です。裁判室では裁判長の椅子に座り、裁判官の目線で室内を実感しています。

食事は「特産館ささやま」での食事予定でしたが、予約席で満杯、下見の時とは予想外のことになっていました。なんとか食事を済ませて、篠山市のメイン通りを散策しながら、旧篠山市役所の大正ロマン館として土産物店になっているところで約1時間遅れで現地ボランティアとドッキングしました。

5 ボランティアの案内で篠山城の大書院を見学します。中には鎧が並んでいるのですが、これが紙製ですが立派なものです。建物の上段の間などの立派な作り、これも一度焼失しての再建されたものです。

見学の途中ですが強く雨が降ってきました。大変です、次の武家屋敷には行けません。時間も遅れています。決断の時です。雲の合間を見て写真撮影して武家屋敷の見学は残念ながら諦めました。これで篠山市の見学は終了とします。



- 6 この篠山市を目的にしたのには訳があります、明智光秀悲しい話の一つです。
篠山城の南東方向の高城山(標高456m)は、別名丹波富士と呼ばれる美しい山に波多野氏を城主として八上城があったのです。八上城は標高差230mにもおよび80階建てのビルに相当する高さを誇る西国屈指の山城です。
- 7 1568年(永禄11年)信長が將軍義昭を伴い上洛すると丹波の国人衆はいずれも臣従を誓ったのです。この時八上城主波多野氏・黒井城主萩野氏も信長に従う姿勢を見せていた。しかし1571年(元龜2年)黒井城の萩野正直は將軍義昭の要請に応じて、反信長となり織田方に属していた丹波出石城主の山名氏の領土に侵攻するのです。
- 8 第一丹波攻め1575年(天正3年)が始まります。十一月丹波の赤鬼と称される萩野(赤井)正直の黒井城を包圍し攻撃を仕掛けるのですが、八上城主波多野秀治は味方のふりをして協力の姿勢を見せていたが、攻撃が開始されると手のひらを反し萩野氏と供に明智方を攻撃、明智軍は阪本城に撤退を余儀なくされました。光秀は敗戦を教訓にして態勢を固めなおし、まず丹波国人衆の切りくずし、領地の安堵を条件にして織田家への服従を促すのです。
- 9 第二次丹波攻め1578年(天正6年) 三月ころから八上城の周囲に付城を築き八上城を兵糧攻めにし、九月ころから鹿垣(ししがき)をめぐる徹底した兵糧攻めが展開されるのです。八上城では草の根も食べつくし、飼っていた牛馬も食べつくす状況である、徹底した兵糧攻めで城内の者4~500人が餓死したとあります。
- 10 しかし城方も負けてはいません。1579年(天正7)正月二六日付光秀の文には付城に八上城方が攻撃を仕掛けて丹波衆の主力であった小島永明が戦死した、と記録があります。その後は兄の小島常義が軍勢を引き連れて八上城攻めに参加するのです。五月ころには落城寸前まで追い詰めるのですが落とせません。六月一日に光秀の母親を人質として八上城の波多野兄弟投降、城は陥落、波多野兄弟の助命を条件に和議を結ぶのです。波多野秀治・秀尚(ひでひさ)兄弟を信長の前に連れ出し光秀の必死の助命も届かずに磔にされてしまうのです。そのため人質となっていた母親は籠城兵により殺害されるのです。同年八月には福知山の横山城を落城させて、福知山城と改名し築城が始まります。
- 11 1582年(天正10年)六月二日本能寺の変「ときは今 あめが下(した)しる 五月(さつき)かな」と光秀の歌がありますが、歌の才能のない私には理解できませんでした。これが光秀の悲しい話です。
- 12 篠山城の見学は降雨のために御徒組武家屋敷の見学は中止として帰途につきます。途中の新名神高速道路の宝塚サービスエリアで休憩買い物をして無事に帰宅しました。



見学会の様子

事業報告 第53回研修見学会

実施日:令和3年11月27日(土)

行先:丹波篠山方面

(丹波デカンショ館、歴史美術館、
篠山城大書院他)

参加者:34名

(会員22名、一般10名、職員2名)

ご参加ありがとうございました。

事業報告 古文書講座『更級日記を読む』

日時：令和3年10月29日、11月12日、11月26日、12月10日

午前10時00分～11時30分

場所：文化パーク城陽西館3階第3会議室

講師：歴史民俗資料館 古文書・民俗文化財調査員 田中香織氏

参加人数：31名

ご参加ありがとうございました。

古文書講座を受けて

会員 滝沢 加代子

初めて更級日記に触れる機会を経て、まず初回の冒頭からひきこまれました。

13歳の藤原孝標の娘が、物語の世界に強い憧れを持ち、読書好きであったことが、同じ年ごろであった私と重なったからです。

本が手に入るまでの期待感、読みながら空想が広がっていき、時間を忘れてわくわくする楽しみ、読後の余韻をかみしめるくぐりは私と同じ体験でした。

その後の上総の国から都までの道中は、平安時代にはどれほど困難であったかと思い、また初瀬詣での行程では烏丸から宇治、木津川橋、猿沢の池、長谷寺と身近な地名が出てくることの親近感がわきました。

あ～このあたりも通られたのかな・・・と思いをはせられることでした。

やがて、物語の世界から、厳しい現実を生きる日々を迎えます。

親しい人との別れ、家の火事、姉や夫の死に悲しむ回想録は私自身の体験と重なることもありました。

今はこの世の存在しない一人の女性が、その時に感じた喜び、悲しみ、戸惑いや悩みを、幾世代も超えて今の時代に残し、文字の発する声に耳を傾けることができました。

更級をなぜ「さらしな」と読むのかも不思議でした。

藤原孝標の最後の赴任地である地名と聞いて納得。私の夫は長野県出身で、今は千曲市となっていますが、さかのぼると更埴市、植科郡、更級郡、しなののくに～となり、姨捨山も近くにありました。

文字を追うだけでは伝わらぬ、その当時の時代背景も分かりやすい解説をしていただき、より深く理解することができたような気がします。

古文書講座で、毎回謎解きのように変体仮名を読み解いていく楽しさは、コロナ禍の日々をひととき忘れて時空を超える楽しみでもありました。



古文書講座の様子

日本語の起源「古典サンスクリット語」と古事記・魏志倭人伝 ①

投稿 会員 高橋 正典

はじめに

2011・2013年の城陽市歴史民俗資料館友の会総会記念講演会で京都大学名誉教授の梶 慶輔先生が、日本語サンスクリット起源説を講演されました。私は、先生の研究に興味を持ち色々調べ、日本語が古典サンスクリット語と漢字の融合語であることを発見しました。全国邪馬台国連絡協議会に先生の意見も聞き「日本語の起源古典サンスクリット語で解く魏志倭人伝」を投稿しました。今回、古典サンスクリット語と日本語の関係や経緯を紹介します。詳しくは全邪馬連ホームページをご覧ください。

日本語サンスクリット起源説の経緯

明治の京都の英学者で仏教者の平井金三氏は、雑誌「新公論」に『日本の言葉はアリアン言葉なり』を発表し、日本語とヨーロッパ・インド等の言語とを比較して外国学者中心のウラル・アルタイ語族説を否定されました。特に日本語の主語・目的語・述語の順、50音、発音はサンスクリットに似るとされます。

梶 慶輔先生は、平井氏の説を継ぎヴェーダとサンスクリット語の日本伝播について研究され、各種文献を引用してその渡来について記されています。そこでは、サンスクリット語を話すアリア人は、中央アジア北部で遊牧生活を送っていたが、紀元前1500年頃気候変動のため、一部が牧草を求め南下し現パキスタンのガンダーラ地方に到達。その後インド北部のパンジャブ地方に侵入し、そこに約500年間定住する。その地で先住のモンゴル系チベット・ビルマ人やドラヴィタ人と混住が進む中で、彼らは、サンスクリット語を話すようになったとされます。アリア人は、此の地でリグ・ヴェーダ（神の賛歌）を完成、古典サンスクリット語を作る。紀元前1000年頃、アリア人が、人口増加などでガンガー川流域に侵入したため、そこに住むチベット・ビルマ民族は、余儀なくインドシナ半島や神聖なヒマラヤ山地、太陽の昇る東へ移動したとされる。紀元前500年頃にはガンガー川流域から東へ移動したヴェーダを信仰するチベット・ビルマ人の一部は中国の昆明付近から長江を下って東シナ海を渡ったり、インドシナ半島を南下、中国大陸南岸沿いから東シナ海を渡り日本に到達したとされ、彼らが弥生人とされる。

一方、近年黄河文明より古い長江文明の調査文献が出版されている。梅原猛・安田喜憲共著『長江文明の探究』によると、約4000～4200年前の気候変動や、約3000年前頃の寒冷化で北方黄河流域の畑作牧畜民が大規模に民族移動し、これに押され長江流域の稲作漁労民が大規模に南下し、上流山岳地帯や東南アジアへ移動し、一部が東シナ海から日本列島に漂着したとされる。紀元前750年頃の小氷河期の春秋戦国時代以降には、戦乱による難民が長江を下り東シナ海から黒潮・対馬暖流に乗って九州北部に弥生人として稲作をもたらしたとされる。長江からの弥生人は、何波にも渡ったと考えられます。

弥生人のルーツ：北インド・チベット・中国

現在のインドシナ半島のミャンマー、タイ、ベトナム、カンボジア等の言葉は、一～三音節で多くが一音節（一母音と子音で構成）、日本語に似た助数詞（匹、人、個）がある。文法は中国語にも似て簡略ですが、発音は難解。ガンガー川流域に定住していたチベット系モン・クメール族のミャンマー語には「てにをは」にあたる格助詞がある。クメール語は母音の数が多いが、発音は平明です。

日本語は古典サンスクリット語と漢字の融合語

ピエール＝シルヴァン・フィリオザ著 竹内信夫訳「サンスクリット」によると、古代インドでの古典サンスクリット(名詞複合語)は、文法的機能の削減により、残された名詞語幹、動詞語根・語幹の連続体として、非常に簡便な言葉となった、とある。この結果、インドシナ半島では、古典サンスクリット語が伝播し、地域の言語と融合し、この地域の特徴の一～三音節の短い単語となって使われています。

日本に渡来した古典サンスクリット語を簡単にいえば、漢文に似て文法は簡略で、一音節一意の漢字に対し語頭一～三音節の言葉です。ただし発音は中国語の四声に対し平明な発音であるため、意味が曖昧で不明確です。古事記や魏志倭人伝は、古典サンスクリット語の音読み(呉音)と訓読み混合の漢文で表現されています。訓読みは、漢字の成り立ちを示す解字を古典サンスクリット語で表現したものです。さらに、格助詞、助数詞、動詞活用語尾などがインドシナ半島、朝鮮半島から入り、現代文になったものと考えられます。つまり日本語は、古典サンスクリット語と漢字の融合語です。しかしいづれにせよ、日本語の来歴を明らかにすることは大切ですが、古典サンスクリット語によって古代史が解読できる結果こそが重要です。次に、漢字の音読み、訓読みを紹介します。

参考 全国邪馬台国連絡協議会ホームページ <http://zenyamaren.net/>
 会員交流「私の邪馬台国論」欄

表1-50音とサンスクリット語アルファベットの関係

母音	50音にない	a	i	u	e	o
	サンスクリット語	ā	ī	ū	ai	au
子音	アルファベット		r	l		
k	kh	あ	い	う	え	お
g	gh	か	き	く	け	こ
s	c ch ś ṣ	が	ぎ	ぐ	げ	ご
j	ih	さ	し	ず	せ	そ
t	ṭ th t ṭh	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
d	ḍ d dh ḍh	た	ち	つ	て	と
n	ñ n	だ	ぢ	づ	で	ど
h		な	に	ぬ	ね	の
b	bh	は	ひ	ふ	へ	ほ
p	ph	ば	び	ぶ	べ	ぼ
m		ま	み	む	め	も
y		や	い	ゆ	え	よ
r	l	ら	り	る	れ	ろ
w	v	わ	ゐ	う	ゑ	を
ṅ		ん				

注 サンスクリット語のアルファベット順 aāīiuūē

ai o au k kh g gh ṅ c ch ṅ ṭ th ḍ dh ṅ ṭ th ḍ dh n p ph b

bh m y r l v ś ṣ h ←

表2 サンスクリット語の日本語読み変え音

日本語の音	サンスクリット語の発音 (ラテン語 [ローマ字] 表記)
ア	a, aha, ava
エ	eu
オ	ā, o, au
キ [ギ]	ki, khi, gi, ghi, kṛ
チ (シ)	ci, chi, ti
ジ	ji, di
タ [ダ]	ta, tha, da, dha, dhā
パ (ハ)	pa, bha, ha
ヒ	hi, vi, vṛ, pi
ミ	mi, mṛ, vī, vṛ
ワ (ヴァ)	va

注 実際の解釈で、有効と考えられる発音

表3 古事記の三貴子の古典サンスクリット語による解説：音読みは発音からサンスクリット語を選んでいる

天照大御神 (アマテラス大御神) 音読み	天の支配権を持つ大御神 [amara (アマラ) 天・不死 / dheya (デーヤ) 保持されるべき / raśmi (ラシュミ) 手綱・光明 / 大御神]
月讀命 (ツクヨミの命) 音読み	夜を照らし顕す命 [dyut (ツト) 照らす / kurvat (クルワト) 顕す / yāminī (ヨミニー) 夜 / 命]
建速須佐之男命 (タケハヤスサノヲの命) 音読み	海の破壊する力を生み出す南の風の支配者の命 [dakṣiṇa (ダクシナ) 南の / ketu (ケーツ) 支配者 / vāyava (ワーヤワ) 風 / sū (スー) 創り出す / salila (サリラ) 大洋 / nāśa (ノーシャ) 破壊 / ojas (オージャス) / 命]
大御神 (オボミカミ) 訓読み	果てしない広がりをもつ天の神 [ābhoga (オボガ) 果てしない広がり / mṛj (ミジ) 清める・輝く / kha (カ) 天 / vīra (ミーラ) 神々の称・雷神]
命 (ミコト) 訓読み	話す指導者 [vīra (ミーラ) 神々の称・英雄・指導者 / kath (カト) 話す] 命の解字の意味は、神や君主が意向を表明すること

令和4年度 歴史民俗資料館事業計画

① 春の資料紹介

テーマ:「古墳へ行こう!2022+発掘調査速報展」

期間:令和4年4月23日(土)~6月19日(日) 開館日数:46日間

内容:小学校6年生の社会科『日本のあゆみ』『大昔のくらしと国の統一』の学習に合わせ、久津川車塚古墳ができるまでの様子を模型やイラストで紹介します。また、昨年度の市内発掘調査の成果についても紹介します。

② 夏季特別展

テーマ:「ゲームの書籍とゲームの文化」(仮題)

期間:令和4年7月9日(土)~9月4日(日) 開館日数:48日間

内容:平成30年度夏季特別展「CONTINUE-ゲーム90年の歴史-」の第2弾として、ビデオゲームに着目し、雑誌・攻略本などの資料からビデオゲーム文化の変遷について解説します。また、関連するゲーム機なども併せて展示することによりゲーム文化を幅広く紹介します。

③ 市制施行50周年記念特別展

テーマ:「城陽の至宝-原始古代から現在まで-」(仮題)

期間:令和4年10月29日(土)~令和5年3月21日(火・祝) 開館日数:102日間

※前期:10/29日(土)~12/18日(日) 後期:1/7日(土)~3/21日(火・祝)

内容:市制施行50周年を記念して、古代から現代までの城陽市の文化財を紹介します。

前期は古代から近世の資料、後期は近現代の資料と民俗文化財に関する資料を展示します。また、ギャラリー展示では城陽市のあゆみを写真パネルで振り返ります。

友の会では研修見学会、文化財講座、古文書講座など、様々な事業を企画しています。
ぜひご参加ください。



ごりごりくん

城陽市歴史民俗資料館友の会だより 第49号
発行日 令和4(2022)年4月30日
編集 城陽市歴史民俗資料館友の会広報
連絡先 京都府城陽市寺田今堀1番地
城陽市歴史民俗資料館
電話 0774-55-7611 fax 0774-55-7612